



Kobe Shoin Women's University Repository

KARASHI-DANE

世紀末芸術：逆説性と価値

著者	宗像 衣子
著者別名	MUNAKATA Kinuko
雑誌名	研究紀要．人文科学・自然科学篇
巻	51
ページ	二九-五一
発行年	2010-03-03
URL	http://doi.org/10.14946/00001563



世紀末芸術

——逆説性と価値——

宗 像 衣 子

序

一九世紀末の西欧の芸術ないし文化は、その意義を現代芸術及び文化のひとつの源としてどのように考察できるだろうか。西欧近代において社会は大きく変貌した。それに応じて文化そして芸術も変革を迫られた。その中で、日本の芸術や文化がどのように関わってきたかは注目すべき事柄と考えられる。本稿ではそうした実態を概括的に捉え、そこに見られる芸術のひとつの在り方を明らかにしたい。

手順として、まず西欧・欧米、さらに日本において社会がどのように変貌したかを本稿において必要な範囲で概観したい。次にそうした社会で、文化や芸術が西欧国家それぞれにおいてどのように新たに生まれ成長したかをしかるべく程度をもつて具体的に吟味しよう。そしてそこに関わる日本の芸術や文化を、日本の当時の社会のありようとの関係において検討しよう。このように巨視的に捉えられた全体的動向の中で、現代の日本及び世界の芸術と文化の在り方の意味を俯瞰

することができらるだろう。これによって、一九世紀末文化・芸術の現代における位置づけを浮上させ、その根源的価値がどこにどのようなにあったのかを眺めるのが本稿の主旨である。

一 歴史・社会の変貌

一九世紀後半とは西欧においてまた日本においてどのような時代だっただろうか。ヨーロッパの諸国が国民国家、近代国家としてのおの成立していく時期と言えるであろう。本稿の必要に応じて、国々の様子を瞥見したい。

フランスでは、まず一七八九年勃発のフランス革命を端緒として、自由な市民による近代国家の成立が目指された。相次ぐ革命を過ごし、一八五二年からの第二帝政、一八七〇年の普仏戦争、七一年のパリ・コミューンを経て、そのあと第三共和制の時代となる。国家の産業や芸術、文化の祭典として、万国博覧会が国々で催されてゆくが、パリでは、一八五五年、六七年、七八年、八九年、一九〇〇年と頻繁に開催される。特に一八七八年の万博では日本の芸術や文化が大きく紹介され反響を呼ぶ。この頃にはオペラ通りには電灯が設置されるようになり、街が徐々に生まれ変わってゆく。一八八四年―八五年の清仏戦争でベトナムがフランス保護領に、一八八七年に仏領インドシナ連邦成立。一八九二年にはパナマ運河事件。一八九六年には近代オリンピック大会開催と、新しいパリの街が整備されながら、近代社会がめまぐるしく成長してゆく。

フランスのすぐ北に位置するベルギーでは、オランダ・フランスとの言語上の問題が国としての統一を困難なものにしていた。一八六五年にレオポルド二世がベルギー第二代国王として即位する。一八八〇年頃には二言語主義が実現し、一八九八年にはフラマン語とフランス語の平等が確立する。一八八五年に、コンゴ自由国がベルギー国王の私有地として

成立、一九〇八年にはベルギー領植民地となる。一八八五年ベルギー労働党設立。一八九三年普通選挙が実施されるなか、近代化が進んでゆく。

隣国ドイツでは、一八六一年、ヴィルヘルム一世が第七代プロイセン国王となる。一八六六年からビスマルク体制が敷かれ、同年の普墺戦争でプロイセン勝利、一八七〇年の普仏戦争でプロイセン勝利、そして一八七一年、プロイセンを盟主としてドイツ帝国が成立する。ヴィルヘルム一世がドイツ帝国初代皇帝になる。フリードリヒ三世の三ヶ月間の第二代皇帝の後、ヴィルヘルム二世が第三代皇帝に即位、一九一八年まで続く。群雄割拠が一国としての統一を阻んでいたが、ドイツの国としての歴史的正当性の主張のもとに国家統一が成しとげられた。

その東の国、ハプスブルグ家が華やかな威勢を示すオーストリア帝国では、一八四八年、フランツ・ヨーゼフ一世即位、四九年にオーストリア憲法が成立。しかし一八五一年、憲法は廃止され皇帝専制となる。周囲との戦役を経て、一八六一年ライナー大公内閣が成立。一八六六年の普墺戦争を経て、オーストリアハングリー二重帝国としての成立に至る。

海を渡ったイギリスでは、逸早い産業革命によって資本主義が発達し、ヴィクトリア朝（一八三七—一九〇一）の謳歌の時代であった。労働組合が盛んであった世紀前半期と比べると、ヴィクトリア朝の黄金期と言える。一八四〇—四二年、中国とアヘン戦争。一八五一年にはロンドンで第一回万博が開催される。最新技術による鉄とガラスの水晶宮が会場となる。一八八九年パリの万博会場に出現した鉄工技術の成果、エッフェル塔よりはるかに早かった。一八五八年には東インド会社が解散し、インドの直接統治が開始される。イギリス海軍の測量艦に乗船して世界一周の航海をする中で世界の動植物を研究し進化論を唱えた博物学者ダーウィンが『種の起源』を著したのは一八五九年。一八六一—六八年はメキシコ事件。一八六三年、ロンドンに地下鉄開通。一八七〇年、普通教育法、一八七一年、労働組合法が成立する。一八七五年、

スエズ運河の株式買収。一八七七年、インド帝国が樹立され、女王が皇帝を兼ねる。一八八六年、アイルランド自治法否決。まさに陽の沈むことなき黄金時代である。

さらに海を渡ってアメリカはどうか。一四九二年にコロンブスによって発見された新大陸で、一七七六年に合衆国として独立宣言し、西部開拓を進める。一八六〇年、リンカーンが大統領に当選。一八六一年から六五年、南北戦争は人種問題に解決を目指そうとした。一八六三年に奴隷解放宣言。一八六九年、大陸横断鉄道開通。一八七六年、建国一〇〇年祭。一八八六年、自由の女神像が完成。一八九〇年に西部フロンティア消滅。一八九八年、米西戦争に勝利する。目覚ましい勢いで資本主義国家へと成長してゆく。

では次に、米西戦争で敗北するまでのスペインの情勢を見よう。イギリスに制海権を譲るまで中南米を中心に世界に植民地をもっていたスペインでは、この時期、王位継承紛争に明け暮れ、一八六八年から七四年までのいわゆる革命の六年間を経て、一八七六年、新憲法により、王政復古体制が確立される。ブルボン朝の時代である。政治都市マドリッドと芸術都市バルセロナを中心として一定の国の姿を築いてゆくことになる。

隣国イタリアでは、一八五二年、カヴールがサルデーニャ王国首相となる。一八五五年、クリミア戦争に参戦。縦長いの国の南北の経済的文化的相異によって国家のまとまりが遅れる。統一は一八六一年からである。一八七〇年にローマを併合して、国としての統一がほぼ完成、ローマに七一年に遷都。一八七九年、エチオピアに侵略し失敗する。一八九八年、ミラノ暴動。一九〇〇年、ウンベルト一世暗殺。不安定な世情のなかで近代化が生まれてゆく。

さて、日本の近代化はどうだろうか。二〇〇年以上に及ぶ江戸幕府の鎖国から門戸を開放することになる明治維新は一八六八年である。政治、経済、宗教、芸術と、社会は一挙に西洋文化の波を受けることになる。一八六九年、版籍奉還、

廢藩置県。一八八五年、内閣制度発足。一八八九年、大日本帝国憲法発布。殖産興業、富国強兵は猛烈な勢いで進められた。一八九四年、日清戦争で勝利。一九〇四年、日露戦争で勝利を取る。慌ただしく西洋文化は押し寄せる、その新世界に対して、どのような対応を取るかが重大な問題であった。その対応と共に日本の近代化は生まれ、急展開することになる。

二 文化の変遷

地理的拡大による諸国の密接なつながりを顕著な特色とするこうした西洋、欧米、そして開国・維新と続く日本における歴史、近代化の推進がもたらす社会的状況の中で、芸術ひいては文化はどのような変貌を遂げ、新たな進展を見せるのだろうか。

近代社会、新しい市民の文化、国々の交流のなかで、西欧は緊密な芸術的連動を示し、それぞれの国で相似た性質をもった芸術が生まれる。それ以前の社会の芸術に対抗してゆくような新しい時代の新しい芸術の動向である。フランスではアー・ル・ヌーヴォーと呼ばれる。ベルギーも同様である。ドイツとオーストリアではユーゲント・シュティール、ゼツェシオン、イギリスとアメリカではモダン・アート、スペインではアルテ・ホベン、イタリアではシュティール・リバティと呼ばれ、共に新しい市民社会における芸術の誕生を示す言葉としてその表徴となった。

たとえばそれまでの伝統的な歴史画や宗教画とは異なる絵画が芽生える。市民の日常生活のありさま、自然の中で憩う人々の姿が描かれる。同時に、いわゆる絵画にとどまらず、日々の生活に関わるもの、家具調度、食器、宝飾類、ポスター、タピスリー等に及ぶ芸術の流れが見られるようになる。そこに日本の芸術や文化が深く広範に関わった様子が窺えるだろ

う。

これらが、具体的にどのような人物の手になるどのようなものであったかを確認してゆきたい。国々で共通する点と、民族独自の性質が認められるだろう。おしなべてそれらがどういう方向をもち、現代芸術や現代文化とつながってゆくのか、が眺められないだろうか。

さて、貴重な影響力をもった日本自体はどうか。歴史的な大転換を背負って近代化を歩む日本は、新しいこうした芸術に注目され深く関与しながら、日本国内においてはどのような展開を示すのか。それは日本の現代文化に関わってゆく危機的な問題ではなかっただろうか。

興味深い特色として、ここで、芸術諸ジャンルが互いに関係し合う事態が見られそうである。こうした実態を照らし出すべく、次節では、ジャンルごとに、国々の様子を見てゆきたいと思う。そこから国々の多様なつながりが見出されるだろう。

三 国々の芸術の動向

1 フランス

まずフランスの芸術状況の特色はどうだろうか。主に絵画の領域で、一九世紀前半において中心であった写実主義や自然主義が展開し、まさに現実観察の姿勢の追究の只中から、光が生み出す色彩を感じ覚として捉える印象派が生まれる。それは、科学の進展にも支えられてはいるものの、写実的な科学の目に対する人間の目への信頼と言えるだろう。モネを中心としたこうした印象派グループから、後期印象派、新印象派、象徴派へと展開し、それらはさらに現代芸術への糸口と

なる。具体的には、モネ以外に、ドガ、ルノワール、シスレー、ピサロ、スーラ、ゴーギャン、セザンヌ、ゴッホ、ルドン等、多様な印象派画家、後期印象派画家、象徴派画家たちの登場と活躍が挙げられる。彼らが各々自らの視点から日本の芸術や文化への関心を取り込んでいることは顕著な特質と指摘できる。またこれは、全体的な流れとして、実証的科学の見方からの展開として、芸術の自律性への方向を示す動きと考えられるだろう。

一方で、日常生活の中での芸術、すなわち、機能性や実用性に目を向けた、これまで芸術の範疇に属さなかったような家具調度、宝飾類等が芸術として浮上してきたが、印刷技術の進展により複製芸術が盛んになることもこの傾向と相俟っている。挿絵雑誌やポスターは、市民生活の活況に直接寄与する。ミュシャのポスターは、女性の美しさの表現、精緻な線描表現、曲線模様としてアール・ヌーヴォーを代表する芸術と言えるだろう。ここにも日本の芸術の徴が見える。

陶芸、ガラス工芸の面では、エミール・ガレを特記せねばならない。ガレを生んだナンシーは、パリとは別のジャボニスムの地であった。日本の植物学者の高島北海が日本の工芸品のモチーフ、花や昆虫のモチーフをもたらしただけである。建築にも新しい芸術の姿が現れる。技術の勝利というべきエッフェル塔が、フランス革命一〇〇年記念として万博会場に聳え立つだけでなく、新しいパリの街の地下鉄の入口に植物の曲線のデザインが際立つアール・ヌーヴォー様式が見られる。ガラス屋根付きアーケード、商店街通りパッサージュも同様である。科学と芸術の均衡、芸術と生活の密接な触れ合いが窺える。

文学の面でも、社会の現実を描き出す写実主義、さらなる推進としての自然主義において多くの文人、バルザック、ゾラ、フロベール等を輩出するが、他方、詩の領域では、ロマン主義的感情からボードレールの高踏派を、さらに象徴主義の詩人たちの目覚ましい活躍が見られる。ランボーはシュールレアリズム・現代芸術を生み出す契機となり、ヴェルレー

ヌ、マラルメは、言葉とイメージそして音楽に芸術の真価を求め、やはり後の芸術に多大な影響を及ぼす。芸術と現実の相克のなかで、芸術の自律性が追及されてゆく流れとも考えられる。文学者たちは画家や音楽家たちと深く交流し、相互に影響し合いながら、新しい芸術を生んでゆく。ここでも多様な角度から、日本の芸術や文化に関心が寄せられていることは看過できない。

言葉の音楽である詩から、さて音楽の世界では、ドイツ・ロマン派のワグナーから離れ、フランスの音楽が、結果的には現代音楽の創始者となるドビュッシーと共に展開する。とりわけドビュッシーは印象派、象徴派の音楽家として、詩や絵画と深く関わる。ドビュッシーがボードレールやヴェルレーヌやマラルメの詩に音楽を付し、マラルメの詩的思考に心酔し、その芸術観に深く心を惹かれたことは銘記しておきたい。さかのぼって、日本に関心を抱いたサン・サーンスも注目すべきであり、ここでも日本の芸術や文化への強い傾倒とその展開が確認できる。

以上のように眺めてくると、芸術諸ジャンルが響き合う様子と共に、東洋の文化、西欧外の文化への強い関心が見受けられないだろうか。科学との拮抗、自然への眼差し、生活の芸術、人間存在への問いかけのなかで、日本の芸術や文化が注目されることに留意しておきたい。またそれらが、芸術の自律性に促されながら、現代的要素を萌芽として示していることにも注目したい。

2 ベルギー

次にフランスの北に位置するベルギーの芸術事情を概観しよう。フランスとの文化的つながりは極めて密接である。言語的にオランダとフランスの間にあり、文学の面では、フランス語による独自の文学作品が見られる。象徴主義作家として、ノーベル賞の『青い鳥』のメーテルリンク、詩人ではヴェラーレン、小説家ではローデンバックを挙げたい。メーテ

ルリンクの文学はドビュッシーの音楽となり世界に響くことになる。ローデンバックの描くブリュージュの静謐な死の様相の神秘的表現もベルギー独自の情趣を思わせるが、この代表的作家三人は皆、パリやパリ近郊で活躍している。

絵画の領域では、ボッスやブリュッゲルの系譜を引く幻想や風刺の作風をも担う奇想や神秘的なイメージが民族性を示しながら、首都ブリュッセルを中心として、クノッップ、アンソール、ロツプスらによる独自の象徴主義絵画の進展する点に興味深い。一八八四年、前衛芸術家団体である「二〇人会」を結成するが、刮目すべきは、ベルギーが、ヨーロッパ大陸とイギリスをつなぐ地理的条件から、国内外の革新的な芸術家に発表の場を提供し、新しい絵画の流れを推進したことだろう。さらにこれは、「自由美学」展へと発展し、国際的で多様な芸術発信の場となる。ルノワール、ゴーギャン、ゴッホ、ルドン、スーラ、ピサロ等のフランス人、モリス、ビアズリー等イギリス人の参加、また、絵画だけでなく、挿絵、ポスター、タピスリー、家具調度の展示をも考えると、地理的交流の場として新しい芸術を展開させる役割を担うベルギーの位置がよく見える。

これらに深く関わる建築家ヴァン・ド・ヴェルド、ヴィクトール・オルタのアール・ヌーヴォーの成果も顕著である。植物的な曲線、さらに抽象的な曲線を示して、フランスと共にアール・ヌーヴォーの国際的な発祥の地、中心の場となる。ヴァン・ド・ヴェルドに注目したベルギー人サミュエル・ビングは、「アール・ヌーヴォー」の名をもちジャポニズムの拠点となるパリの店の内装を彼に依頼している。

このようにベルギーは、独自の歴史的民族性を保ちながら、地理的弱点をむしろ地理的優位に転じて、新しい芸術の国際的交流の場となり、そこに諸芸術の交流もまた明らかに認められるのであった。

3 ドイツ

ベルギーからもアール・ヌーヴォーの影響を受けた、その東に位置する国、ドイツに目を投じてみよう。まず群雄割拠の困難から漸く統一を図ったドイツでは、ドイツの国家としての顕揚が問題であり、それを支える文学、そして国民を鼓舞する音楽が席卷したと感ぜられる。グリム兄弟は、一八五二年、『ドイツ語辞典』を出版したのち、『グリム童話』においてヨーロッパの伝承文学を収集するが、これもその表れと言えるだろう。政治的色彩の濃い自然主義文学が栄えるが、一方で、九〇年代後半には、ニーチェを根幹とする反自然主義文学、すなわち、印象主義や新ロマン派の文学が、ゲオルゲ、ホフマンスタールに見られ、トーマス・マン、リルケへと続く。テオドール・シュトルム等、ドイツの内面性をもつ詩的レアリズムの作家たちも活躍する。

音楽領域とのつながりとしては、一九世紀、フランスやイタリアを手本にしながら、ドイツ・オペラはワグナーと共に飛躍的發展を遂げる。思想家、文学者でもあるワグナーもまた楽劇を創始して総合芸術性を打ち立てる。戯曲の面で、ドイツの威信にも強く関わると言えるだろう。

美術の領域では、ミュンヘンを中心に新しい芸術を鼓舞する美術雑誌『ユーゲント』が、一八九六年に発刊される。ユーゲント・シュティールを代表する画家として、ベルギーのクノップフから影響を受けたフランツ・フォン・シュトゥック、カール・シュトラートマン等が見られるが、彼らは性や官能を主題とし、東洋的な雰囲気を醸し出す。蛇、頭髮など幻想的で装飾的な表象が際立つ。「生活の中に芸術を」というユーゲント・シュティールは、工芸、応用芸術に表現される。ハンブルク的美術工芸博物館館長のユトウス・ブリנקマンの日本熱がジャポニスムを扇動する。白鳥、孔雀、ユリ等の蛇行する曲線が好まれる。オットー・エックマン、エミール・オルリクがそうした表象を鮮明に示した人物として挙げら

れるだろう。ドイツのユーゲント・シュティールは、後述のイギリスのアーツ・アンド・クラフツ運動に多くを負っているが、機械製品を認め、やがてバウハウスなどの近代デザインへと導かれる。

国民意識の高揚のなかでドイツ世紀末文化は展開し、国々との芸術的交流とともに、独自の文化を進展させる。ここでも生活の芸術が見られ、また日本への大きな注目が見受けられる。

4 オーストリア

ドイツと歴史的關係も深いオーストリアはどうだろうか。大帝国から、周囲との国境線の争奪のなかで縮小した国オーストリアの芸術状況に顕著なものとして、美術の領域を特記したい。ウィーンを中心にアール・ヌーヴォー、分離派様式として展開した新しい芸術運動は、自然主義から象徴主義へと、葛藤のなかで進展する。クリムトを中心に、時代の芸術、芸術の自由が唱えられ、分離派ゼツェションが結成されたのであった。ブルク劇場や美術史博物館の装飾を皮切りに、公共への芸術参与も目覚ましい。歴史主義絵画からの作風の変化のなかで、生と死の様相をエロスと女性の性のテーマとして描いたクリムトであった。科学との関係、音楽との関係、日本との関係が興味深い。女性、金地、縦長、文様は、デザイン化されてゆき、さらに現代へ引き継がれる芸術を内包していると言えるだろう。クリムトは、やがてエゴン・シーレやココシユカを育てていくことになる。建築の面でも、新しい芸術は顕著である。オットー・ワーグナーが、金色の装飾、流麗な植物模様で新しい生命感を表現している。

一八七三年のウィーン万国博覧会では、日本の文化が大きく紹介されるが、それはヨーロッパへの紹介として初期のものである。日本ではウィーンの音楽に親しむことになる。担い手が宮廷から庶民に移った音楽世界であるが、古典派のハイドン、モーツァルト、ベートーベンを継いで、ロマン主義音楽としてシューベルトがウィーンの音楽的地位を確固たる

ものにする。その後、一九世紀後半はウィンナ・ワルツ、オペレッタがヨハン・シュトラウス一世と共に生み出される。ヨハン・シュトラウス二世は、ワルツ王として、民俗性を内に秘め、ウィーンの市民感情から発し、世界に愛される音楽へと展開させる。音楽によるインターナショナル性が見られる。

文学の世界はどうか。やはり『現代文学』が創刊され、サロンの中で、世紀末のウィーン文学が作りだされてゆく。文芸誌が次々生まれ、文学が論じられてゆく。オーストリア文学はドイツ文学に包括されがちであるが、独自の性質を帯びた、若きウィーン派として小説家劇作家シュニツラー、文学界の神童ホフマンスタールが挙げられるだろう。医師の父をもち、自身も医学を学ぶシュニツラーは精神分析にも関心を抱いてゆく。精神分析の祖としてのフロイトの当時の活動も見逃せない。彼は、精神的不調に対する治療として催眠療法を、パリでシャルコーに学ぶ。連想法や夢の分析が編み出されてゆく。性的抑圧に光が当てられることになる。目に見えないものを科学的に解明しようとする意識は、時代の思想を反映し、芸術とも深く関連してゆく。不可視のものへの視線という大きな動向が見られるだろう。

このように、分野・領域の相互影響が見られる中で、新しい芸術は発展し、それは、民族性と国際性を共に担い、日本の芸術とも親密に関わりながら、現代へと向かってゆくのであった。

5 イギリス

次に、海を渡ったイギリスの状況はどうだろうか。大陸から海を隔てた島、イギリスでも、また新しい芸術運動が現れた。美術界の現実状況の墮落を感じたラファエル前派に、過去への注視が見られる。ラファエル前派、エヴァレット・ミレーやロセッティが、素朴で敬虔な宗教心から、新しい芸術創造を企てる。ロセッティは詩人としても活躍する。特に女性像をテーマとするその耽美主義的象徴主義的傾向は、ビアズリーにも顕著に認められる。閉ざされていた性的表現が明

るみに出される。そのエロティックでグラフィックな様相は目を引く。白と黒の構図、線描に、ジャポニスムの影響が色濃く見て取れる。人力と機械力が混交するロンドンで、中世の夢は、ウィリアム・モリスのアーツ・アンド・クラフツ運動を引き起こす。モリスは日常生活に美を取り込もうとする、手作りの美術は、壁紙、織物、家具、装本、挿絵等、新しい装飾芸術を生み出してゆく。モリスは、社会運動をも含む広範な活動を手掛けるが、そこに思想性の強い、時代ならではの性質の様相を窺うことができるだろう。

この国でも文学と美術のつながりは強い。文学領域との連動は明瞭である。ビアズリーの挿絵になる『サロメ』は、オスカー・ワイルドによって文学世界と緊密に結ばれている。象徴主義的耽美的傾向が強く認められる。これは芸術の自律性へと方向づけられ、二〇世紀文学へと導かれてゆくだろう。ワイルドの他、アーサー・シモンズ、ウィリアム・ブレイクが挙げられる。シモンズはフランスの象徴主義の紹介者として、シモンズ同様ウォルター・ペイターは唯美主義の主導者として活躍し、アイルランドのイエーツにも影響を与える。美術と文学との結びつきは、文芸雑誌にも見られる。『イエロー・ブック』『ザ・サヴォイ』などにビアズリーも参加する。ここでもジャポニスムの現れは著しい。一八五一年、水晶宮がヴィクトリア時代を誇る第一回万博の後、六二年の万博での日本文化の紹介は画期的だった。一八八五年にはサリヴァンの『ミカド』が上演され、能に惹かれたイエーツは能演劇を創作するに至るのであった。

浮世絵の大胆な線、非対称な構図、モチーフの点でジャポニスムを生む挿絵画家たちと共に、アメリカ生まれのコスモポリタン、ホイットスラーを挙げておかねばならない。彼の作品世界に、日本の芸術・文化の熱狂的な取り込みと共に、中樞としての音楽性への強固な意識が見られる。ここにも抽象的な現代芸術への道が開かれていると言えるだろう。

さらに教育的な観点から、絵本や童話の世界における、自然や動物への注視も大きな特徴である。女性の活躍・進展も

顯著である。ルイス・キャロルのアリス、ベアトリクス・ポターのピーター・ラビットは文学を越え、その自然観・動物観は思想や文化に直結している。

音楽の在り方も興味深い。古き良きイギリスの象徴とされ、日本でも好まれる極めて国際的な『威風堂々』のエルガー、イギリスの民族的旋律、東洋的な題材を取りこんだ『惑星』のホルストを挙げておこう。他国と比べ、音楽領域は地味ながら、確かな民族性と国際性が感じ取れる。

多彩なイギリスの芸術状況に、やはり芸術の自律性への方向、芸術ジャンルの豊かな相関性、日本の文化・芸術への深い関心が認められるだろう。

6 アメリカ

さらに海を越えたアメリカではどうか。西部開拓等による国の巨大化のなかで、人種問題は大きい。南北戦争が一八六一年に勃発し、リンカーンが自由平等な人民のための国を保障したのが一八六三年である。こうした国情を反映して、社会の情勢を如実に映した文学や音楽が勢いを放つ。

文学としては、ゴールド・ラッシュや南北戦争後の文学として、現実社会に目を向けたリアリズム文学の台頭を挙げねばならない。現実と人間、個と個、個と社会の葛藤を描く小説が活況を呈する。フロンティア文化、アメリカ土着文化を題材にするマーク・トウェイン、ヨーロッパ文化との対比においてアメリカを描くヘンリー・ジェイムズ、アメリカ中産階級の日常の現実を描き出すウィリアム・デイン・ハウエルズに注目したい。

アメリカン・デモクラシーの上に花開くアメリカ美術を記さねばならない。ヨーロッパ美術の既成概念では捉えにくいものが、この時代のアメリカ美術にはあるといえるだろう。南北戦争を描くホーマーやシュミットがいる。ハドソン・リ

バー派は、現実の原始的で雄大なアメリカの自然を映す。

同様にデモクラシー社会に即した音楽も目覚ましい。黒人奴隷のワークソングの音楽、黒人音楽はこの国独自のものがある。南北戦争をきっかけに、黒人教会でのゴスペルなど黒人宗教音楽、ジャズが見られ、ヨーロッパのバラードを引き継いだブルースも誕生する。悲しみと喜びと夢が託された音楽を聴くことができるだろう。オペラやオペレッタからミュージカルが生まれる。幾多の発明を成し、人々の生活の便宜と憩いに寄与したエジソンは特筆すべきだろう。彼から映画が展開する。科学と共に歩むこのような大衆芸術文化が市民の楽しみの芸術となつてゆく。

こうした状況にあつて、アメリカ社会からやや離れた芸術家たちも見られる。象徴主義のホイットスラーがヨーロッパで活躍するのは、先に見た通りである。建築のルイス・サリヴァンなど、ヨーロッパでの評価の方が高い芸術家も見られる。このように独自の歴史のなかで急速な発展の使命を負うアメリカでは、明確にその社会を反映した芸術が見られる。デモクラシーに基づく大衆の文化が生活に根付く。生活の芸術に、やがて国際的に大きく動いてゆく新しい大衆芸術の萌芽がよく見られるだろう。

7 スペイン

では、海を戻ろう。一九世紀末にアメリカに敗戦したスペインはどうだろうか。政治的混乱のなかで、政治都市マドリッドとは別に、海と山に挟まれた地、カタロニア地方バルセロナは、伝統的な文化の都市として発展する。町を代表する芸術家はまず何といつてもガウディだろう。スペインのアル・ヌーヴォーを代表する人物である。いまだ未完成のサグラダ・ファミリアはカタロニア伝統文化が世界に発信する国際性をもつ。ガウディの構想を推測しながら現在も建設が続いている。ガウディは、自然は曲線から成ると考え、破碎タイルで、色鮮やかに海と空のイメージを曲線で表現した。グエ

ル公園、カサ・ミラは世界遺産に登録されている。同じくインターナショナルな芸術家として、またピカソも挙げたい。長命のピカソは、生まれながらの芸術家にして、時代の芸術の流れを具現して来たが、この時期のオール・ヌーヴォーにも深く関わっている。彼がパリ時代にフランスから受けた影響は大きい。

同じように、音楽の領域でも、スペイン独自の民族性と国際性を担う人物たちがいる。作曲家でありピアニストであるアルベニス、世界を放浪しながら心象を音に乗せるかのように多くの作曲を手掛け、ヨーロッパ各地で演奏活動を行っている。組曲『イベリア』は、フランスのドビュッシーを深く感動させたという。もう一人、グラナドスを挙げたい。スペインの民族音楽に根差しながら近代性を目指し、近代スペイン音楽を開いた人物とされる。ギターやフラメンコも、世界に発信されたスペインの民族性と言えるだろう。闘牛もスペイン独自のモチーフと言えるだろうが、ピカソもその画布に取り込んだものである。

文学領域では、ヨーロッパ文学の影響のもとで、写実主義的文学がロマン主義から展開する。科学的姿勢がスペインの民族的性質と相俟った作品を生み出してゆく。生活、日常の現実を描写したガルドスの『国民挿話』が際立っている。ロマン主義的傾向をもつものとして、ベツケルの『抒情詩集』が挙げられる。

このように、ガウディを代表として、スペイン独自の民族性の表現をインターナショナルな価値へとつなげたスペインの芸術が見られる。スペインは、スペイン独自の民族性が国際的価値に結ばれた文化と芸術を現実根づかせ育んだといえるだろう。

8 イタリア

その隣のイタリアの様子はどうか。ルネッサンスの精華があまりに大きかったイタリアは、この時代独自の美術

としては、ミラノやフィレンツェでボッジ、ミケラツツイの建築、ブガツティの家具に、アール・ヌーヴォーの花の様式を見るが、さほど目覚ましい人物は出ない。むしろその後、現代へ向けて、マリネッティによって未来派の芸術を生んでゆくことを特筆すべきだろう。絵画では、フランスのバルビゾン派に影響を受けたイタリア印象派というべきマッキア派の活動が見られる。象徴主義的なセガンティーニも挙げねばならない。

こうした美術領域よりも特記しなければならないのは音楽界である。ヨーロッパの文学をも組み込んだ音楽として、オペラがミラノで花開く。一九世紀前半の、機知に富み喜劇的要素を取り入れる才をもつロッシーニが大きな力を示した後、引き続がれてゆくオペラの系譜がある。他に二人の音楽家を挙げねばならない。イタリア統一の政情のなかで、愛国心を鼓舞する愛唱歌を生むヴェルディがいる。ロマン主義を基盤とした姿勢ではあるが、現実を映す写実主義的傾向が見られるだろう。日常性を取り込まれるようになるが、それでも抒情的な甘美なメロディーのプッチーニを見逃せない。イタリア音楽は音楽を中心とし、歌詞の意味の理解を重視し、それに付される華麗なメロディーを特徴として発展してゆくことになる。

世界の文学性を担う音楽、オペラの傾向に関わって文学領域はどうか。ヴェリズモ運動が見られる。それは、社会の変遷、現実の人々の生なかで、内面に深い心情を含みながらも写実主義的自然主義的傾向を示すものである。地方の庶民の生活を生彩に描いたヴェルガを挙げたい。また中部イタリアでは詩人カルドゥッチが社会に対峙する詩を歌い、一九〇六年ノーベル文学賞を受けた。

このように、社会の混乱と統一、その後のさらなる混迷の中で、社会の現実に目を向け、芸術で、特に音楽で、それを世界に発信するイタリアの芸術の姿を見ることができるよう。とりわけ音楽の大きな特色が現代へ向けて磨かれてゆく。

四 日本の芸術事情

鎖国の江戸時代から開国明治への流れの中で、欧州各国から近代化への大転換を迫られた日本はどうだろうか。極めて特殊な事情にある。醸成されてきた日本の伝統文化と唐突に突きつけられた外来の西洋文化の衝突が、絡み合う特殊な状況をもたらす。社会の在り方と同様に、当然、概してふたつの方向を見なければならぬだろう。ひとつの方向としては、開国と同時に外国の文化、思想、芸術が種蒔かれ、大きな影響を与え、それに飛びつき翻弄されることになる。一方で、異国の文化によって、翻ってより一層意識されることになった伝統的な芸術が紆余曲折を経ながら育つてゆく。江戸期の文化芸術がヨーロッパに取り入れられる動きのなかで、それが諸外国の文化とそれぞれに関わることも重なる。日本への逆輸入という流れの現象をも生みだすことになる。

特に根本的相克が眼によく見える美術領域から概観してその様子を確認しよう。写実を旨とする西洋美術の流れが洋画として取り込まれる中で、日本画もまた革新を迫られることになる。一八八九年に東京美術学校（現東京藝術大学）が設立され、講師フェノロサと弟子岡倉天心を中心に、日本画再興の運動が見られる。狩野派を核とするものであった。西洋美術をそのまま受け入れる欧化主義を排し、西洋の写実を受け入れながら、なお日本美術の伝統的特質としての観念や理想にそれを融合させようとする。ここに日本の芸術の近代化のひとつの姿勢が見られる。橋本雅邦のもと、菱田春草、横山大観、下村観山らによる模索の活動のなかで、日本画の革新展開が進められる。他方、洋画の世界で、フォンタネージに学びフランスに渡った浅井忠、同じくフランスへ留学しラファエル・コランに師事した黒田清輝による洋画壇の革新と育成には目を見張るものがある。黒田は、印象派の評価が定着していた当時の画壇風潮をよく知らず、一般的に地位を占

めていたコランから学んだが、明るい色彩の絵画は彼の画布に新鮮な影響を与えた。作品は印象派に通じる外光派と呼ばれ、久米桂一郎と共に白馬会を結成して、東京美術学校洋画科と白馬会に近代芸術を根付かせてゆく。彼らの思想や感覚によって、青木繁、藤島武二らを輩出することになる。

文学世界にもよく似た傾向が現れる。庶民の楽しみであった江戸期の戯作文学への反省が起きる。読本、洒落本、滑稽本、人情本、黄表紙がもはや古きものとされる。写実主義的姿勢を唱えた坪内逍遙の『小説神髓』、ロシア近代文学を学んでより写実に徹底した二葉亭四迷の『浮雲』、ドイツに渡った軍医森鷗外の『舞姫』、西欧文化の無批判な受容を問いたす漱石による『吾輩は猫である』の登場等が、それぞれ西洋文学や西洋文化に触れた明治期の文学者たちの革新運動を進めた。それらは概して写実に対する相克であったと言えないだろうか。明治維新の封建制の打破、個人の確立や自我の発生が契機となる意識であった。漱石は、美術領域にも関わり、洋画家橋口五葉や中村不折に装丁挿絵に関する指示を与えている。与謝野鉄幹・晶子の文芸雑誌『明星』や晶子の歌集『みだれ髪』の表紙には、藤島武二によるアール・ヌーヴォーを組み込んだ絵が見られる。アール・ヌーヴォーの逆輸入の表れと言えるだろう。流線的な女性の髪はアール・ヌーヴォーの重要なモチーフであった。

音楽の領域にも変革がある。洋楽の輸入は安土桃山時代から見られるが、江戸時代には西洋音楽は無縁となり、西洋音楽の正式採用は明治二年、薩摩の軍隊の軍楽の教習による。明治五年、学校教育の整備のなかで、小学校に唱歌、中学校に奏楽が課せられる。明治二〇年（一八八七）、東京音楽学校設立で、日本の音楽は洋楽中心となり、邦楽の軽視に至る。能楽、浄瑠璃、長唄等は、伝統芸能として別の発展をしてゆくことになる。横浜で育ちドイツに学んだ滝廉太郎は、日本の伝統音階と西洋音階の両者を見据えた作品を世に示したが、その活躍が二三歳の短命に阻まれることは惜しまれる。

このように、日本では、極めて特殊な歴史状況のなかで、入り組み錯綜した事情を紡ぎ、西洋文化・芸術に対する吸収や反撥、並びに芸術ジャンルの交流が慌ただしく推し進められる。伝統と西洋文化との葛藤が芸術のどの領域にも見られるが、それは総じて写実と象徴の相克だったと言えないだろうか。ここに日本文化の特質を見極めることができないだろうか。そしてその価値は世界的な、かつ現代的な価値となつてゆくことを既述の他国の事情から予感させる。

五 総合的意味

近代において新しい芸術に総合的に概括的に著しく認められることは何であつたあろうか。国々の相異性と共通性を考え合わせて、この時代の文化の特色を総じて振り返り導き出したい。

自由な市民の生活に根差した庶民の楽しみとしての芸術が生み出されてゆくと同時に、逆説的でもあるが、目に見える事物の写実性からその解放へと芸術の自律性が生み出されてゆく流れが認められると考えられないだろうか。すなわちこの逆説性から、芸術が本来、人々の楽しみとしてあるものであるという芸術の性格が推察されないだろうか。

そしてそのような動向に連動する特徴的なものとして、美術・文学・音楽など芸術諸ジャンルの相互のつながりや融合が見られないだろうか。それ自身の追求が、かえつて互いに働きかけ影響し合う結果となる、そのいわば逆説的な様子が顕著に確認できないだろうか。これもまた、芸術が、目から耳から、感覚と思考に作用して意味をもつ、その本来的な総合性や融合性を明かし示すものと考えられないだろうか。そしてそれは国々によつてそれぞれ独自の在り方をしていたと思われる。

これに関わつて、さらに言えることは、国々の芸術の様々が、その国独自のものと、国際的に広がるもの、その両者を

意識的に求めていたということではないだろうか。両者の相互影響の中での進展が認められないだろうか。このことも、芸術が、それぞれ発祥の国民や民族の生活に根差し、かつそこからそれを越える芸術性を目指す、という芸術本来の在り方を示さないだろうか。芸術の本来的あり方と相呼応するような逆説性がここにも見られると考えられる。

そしてこれらを、芸術が社会そして文化から生まれ、かつ文化を生み出してゆく、その極めて大きな潮流のうちに検証できるのではないかと思う。

結びにかえて

近代における独自の国民国家の文化を追究しながら同時にそこから国際的交流を探索するという社会の在り方の二面性、そこに見られた芸術の存り方の二面性、それらと相關する芸術諸ジャンルの相互作用性、こうした多様に認められる逆説性こそが、現代文化、現代芸術の有様とその諸問題へつながり、それらをさらに豊かに導き出してゆくものと言えないだろうか。この時代の世紀末芸術の顕著な性質が、芸術の本質的性格を示しながら、現代芸術の総合性と現代文化の個別性・相互性を産出してゆくのではないだろうか。

我々の現代芸術の特色は、このように近代の国民国家、端緒についた自由な人間、生活する人間の営みをひとつの大きな要因として生まれてきたと思われる。その様子の源、重要な結節点をこのように近代国家の誕生の時、その社会に見ることができないのではないだろうか。ここに世界は広がり、芸術は、逆説的な多様性を含みながら、人々の生活と結びつくだろう。こうした逆説性こそ、芸術が本来もつ逆説性でもあったのではないかと思われる。

主要参考文献（紙幅及び本稿の主旨・内容の都合上、注と図版は割愛した。）

稲賀繁美『絵画の東方 オリエンタリズムからジャポニスムへ』名古屋大学出版会、一九九九

海野弘『日本のアール・ヌーヴォー』青土社、一九七八

海野弘『世紀末のスタイル、アール・ヌーヴォーの時代と都市』美術公論社、一九九三

海野弘・小倉正史『現代美術 アール・ヌーヴォーからポストモダンまで』新曜社、一九八八

大島清次『ジャポニスム 印象派と浮世絵の周辺』美術公論社、一九八〇

倉田公裕『ガラス幻想 アール・ヌーヴォーから現代まで』京都書院、一九九〇

高階秀爾『西欧芸術の精神』青土社、一九七九

高階秀爾『世紀末芸術』紀伊国屋書店、一九八一

高階秀爾『想像力と幻想…西欧一九世紀の文学・芸術』青土社、一九八六

定塚武敏『海を渡る浮世絵…林忠正の生涯』美術公論社、一九八一

馬淵明子『ジャポニスム 幻想の日本』ブリュッケ、一九九七

由水常雄『花の様式、ジャポニスムからアール・ヌーヴォーへ』美術公論社、一九八四

ジョン・ラッセル・テイラー『英国アール・ヌーヴォーブック その書物デザインとイラストレーション』高橋誠訳

国文社、一九九〇

S・T・マドセン『アール・ヌーヴォー』高階秀爾、千足伸行訳、美術公論社、一九八三

ジャポニスム学会編『ジャポニスム入門』思文閣出版、二〇〇〇

『アール・ヌーヴォーの世界』一一五巻、学習研究社、一九八七

Louis Gonse, *L'art japonais*, Ganesha Pub, 2003.

拙著『マラルメの詩学―抒情と抽象をめぐる近現代の芸術家たち―』勁草書房、一九九九

拙著『ことばとイマージュの交歓―フランスと日本の詩情―』人文書院、二〇〇五

拙論「フェノロサの文学観―マラルメから管見―」『ロータス』三〇号、日本フェノロサ学会、二〇一〇（三月予定）